

2007年9月の沖縄島
—「平和学」という暴力・植民地主義—

「沖縄」についての最初の原稿はたしか1988年だったと思う。
まだ学生であった。
その時から沖縄島に踏み込むまでに14年の歳月がかかっている。
その仕事があればおそらくまだかの地を踏むことは避けていたと思う。
緊張した。
「沖縄」出身で僕と同世代の野村浩也がこんなことを書いている。

呼ばれてもいないのに他者のもとへ出かけていくということ

社会学者や人類学者は「他者を知ろう」「沖縄を知ろう」と言った。歴史学者は「事実認識を」と連呼した。政治学者は「紛争解決を」と、経済学者は「経済復興を」と。彼/彼女らは、「それが地域研究だ」と言った。
そして、他者のもとへと嬉々として出かけて行った。

だが、

「強姦の生存者は何度でも問われる、『それはどんな行為だったのか（強姦かどうかはこちらが判断する）』」

平和学習の名による「沖縄を知ろう」は「愚鈍への逃避」から成り立つ場合がある。
いや、多くがそうだと僕は思っている。
それが「無意識の植民地主義」。

「奴隷」が「奴隷」であることを自覚して、琉球弧の地に立つこと、
呼ばれてもいないのに、かの地に勝手に乗り込んでいくこと、
フィールド・ワークとはそんなものだと思っている。

「調査公害」という言葉は、2007年9月の「他者を考える言葉」であり、
「内在する暴力」であった。

僕にとって、
2008年2月19日 いちもり